ふるさとを語る

日本の縮図と言われる兵庫県は、多彩な人材を輩出しています。今回は、アーティスト 清川 あさみさんにお話を伺いました。

アーティスト 清川（きよかわ） あさみさん

■幼い頃の思い出

淡路島の自然の中で過ごしたという記憶がほとんどです。子供の頃は海の近くで馬に乗って、川でザリガニ捕りをして、お正月には山登り。家の周りは田園で、遠くに見える山や近所の神社、牛をスケッチしていました。また、廃材を使って自分で遊び場を作ったり、物づくりは昔から好きでした。

■淡路島の魅力

慶野松原や淡路人形座など魅力的な場所はたくさんありますが、やはり海はおすすめです。南あわじ市出身なので、鳴門の渦潮の景色も好きです。また、朝日の光の変化が面白い。赤色から神々しい光を放って黄色に変化していく姿はとても神秘的です。

■上京のきっかけ

元々は美術の先生になりたくて、高校では美術部に入り美術の道にまっしぐらでした。また、ファッションにも興味があり、高校生の頃から「コム デ ギャルソン」や「ヴィヴィアン・ウエストウッド」を着ていました。フェリーに乗って神戸や大阪まで服を買いに行っていました。

私にとって「コム デ ギャルソン」の創始者　川久保玲さんの存在は大きいです。川久保玲さんは、ファッションデザイナーであり、アーティストでもあり、総合プロデューサーとして活躍されている素晴らしい方です。

このように、自分のアイデンティティがファッションだったので、既存の仕事よりも誰もしたことがない職業に挑戦したくなった。そんな時、美術部の先生が「清川さん、とにかくあなたには東京が向いている。東京に行きなさい。」と背中を押してくれました。

上京し、文化服装学院へ入学。上京した初日に原宿で読者モデルにスカウトされました。漫画みたいな話でしょ（笑）。刺激的だったのですぐにその世界へ飛び込みました。私は身長が小さい方なので、そういった人も挑戦でき

〈プロフィール〉

アーティスト。兵庫県・淡路島生まれ。2001年初個展、2003年より、写真に刺繍を施す独自の表現を開始。デジタル時代に生きる人々が抱える内面と外面の間に生じるギャップや矛盾をテーマに、繊細な刺繍と写真を融合させることで、現実と神話、目に見えるものと見えないものの境界線上にある独創的なアート作品を発表している。
伝統的な手法とデジタル技術を融合させ、ヴァーチャルモデルとのコラボレーションなどでも注目を集める。代表作「美女採集」「TOKYO MONSTER」で知られ、国内外の個展やアートフェアにも参加。
広告・映像・空間デザインなどのクリエイティブ分野でも活躍し、NHK「大奥」のメインビジュアルのディレクションやYOASOBIのMV監督を務めるなど、多方面で高い評価を得ている。さらに、絵本制作や地方創生事業においても伝統芸能や地域活性化に貢献。2022年からは大阪芸術大学客員教授として後進の育成にも尽力している。2023年には虎ノ門ヒルズ駅に設置された大型パブリックアート「Our New World」の制作監修を担当し話題に。2025年2月より天王洲のMAKI Galleryにて個展が開催される。

る服装を提案していると徐々に人気が出てきて、すぐに辞めると思っていましたが結局三年間モデルの仕事を続けました。

■創作活動への道

物づくりや、クリエイティブなことで人を楽しませる方が好きなのに、いつの間にか表舞台に立つようになっていました。読者モデルの仕事では、ただ単に服を着るだけではなく雑誌紙面の企画やキャスティングなどクリエイティブディレクションのようなことをしていたので、学校を卒業したらクリエイティブな活動にスイッチしたくなった。

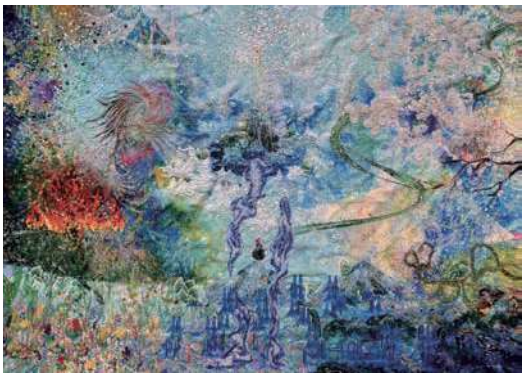
また、ファッションの学校に通っていましたが、ファッションデザインをやりたい訳ではなかったのであまり服を作っていませんでした。卒業制作の際、担当の先生が、「あなた、最後ぐらいは服を作ったら」と言ってくれたので、ワンピースを作りその上に絵を描きました。

双子のようにモデルが出てきたら二つのワンピースで一つの絵が出来上がる作品。それが「装苑」やギャラリーの方の目に留まり、他の作品も見せたところ「個展やってみたら？」と言ってくれたんです。それがきっかけで創作活動を開始しました。

■写真と糸

モデルとして写真を撮られる側だったので、写真は身近な存在でした。また、ファッションの学校に行ったことで糸と出会いました。

写真の上に糸が乗れるのを見た瞬間アートになる可能性を感じ、写真刺繍を始めました。写真という記憶の中に重層的に物質が入ることで全く異なったレイヤーが生まれ違う情報に見える。この瞬間に面白みを感じます。



「はじまりのうた」Begin Again

■アイデアが浮かぶ瞬間

常になんですよ。色々な情報が頭の中にバーっと入ってきて、急に降りてくる。突然自分の中の記憶が新しく生まれ変わる瞬間があって、こういう時にアイデアが生まれます。また、日常会話をしている時ですね。最近では人工知能の研究者や、仕事柄美術や音楽、芸能関係の方と会うことが多いので、物事の見方に刺激を受けたりします。

また、世の中で生じている出来事に現代社会の綻びや矛盾を感じた時もクリエイティブな自分が動き出します。

■心に残る仕事

２０２０年に「南あわじ市地域魅力プロデューサー」に委嘱され、淡路人形浄瑠璃の再生プロジェクトに携わりました。とても大変でしたが、非常に思い出深い仕事になりました。アートを通じた淡路島の魅力発信や、地域交流のきっかけづくり、そして教育に関わることを一気に手がけることができました。

伝統芸能と言うと、理解したいと思うけど難しく感じてしまう。それを現代アートの力で、現代の作家を交えたプロジェクトにすることで子どもにも伝わる魅力が生まれるんですよね。

淡路人形浄瑠璃再生「戎舞＋」

今回は、淡路人形座の既存演目の伝統を尊重しながら、演目内容を現代風に書き換えて、人形衣装や映像も新たにしました。元の魅力はそのままで新たなものを生み出すバランスは、私のようにアーティストでないとなかなかできないことじゃないかなと思います。

■県人会へのメッセージ

首都圏での挑戦は大変なことがたくさんありますが、兵庫の豊かな自然や文化が心の支えになっている方は多いと思います。だから、地元の良さをとにかく忘れず、ふるさとの魅力を発信し続けていきたいと思います。

■これからの挑戦

ふるさとの淡路島で何か面白いことをしたい。淡路は子育てに良い場所なので、芸術で地域の魅力を伝えながら、教育に繋がることをできないか考えています。また、とにかく新しいことが好きなので、訪れたことがない国へ行き、様々な文化を吸収して新しい作風にも挑戦していきたいです。最近は特に人工知能に興味があります。ＡＩの活用は今後当たり前になっていくので、それをどのように扱っていけば良いか考えています。人間がＡＩに食べられないようにしないといけない。クリエイティブな脳を私たちがいかに上手く使いこなせるか次世代と共に考えていきたいと思っています。夢は無限大です。